

わかることによって わからなくなる

龍村 仁 (映画監督)

J i n T A T S U M U R A



映画『地球交響曲第三番』の出演者であり、20世紀最大の宇宙物理学者のひとりフリーマン・ダイソン博士が、こんなことを言っている。

「科学の本当の素晴らしさは、ひとつの自然現象が科学的に理解できたとき、その背後に、私たちがまだ科学的に理解していない謎が無数に存在していることに気付くこと、すなわち“わかることによってわからなくなる”ことにこそあるのだ。

自分は“わかっていない”と気付いたとき、人は必ず謙虚になる。と同時に、その謎をひとつでも解き明かしたい、という強い想いが生まれる。この、目の利便や名誉にとらわれない無私の探究心こそが人類進化の原動力であり、太陽系第三惑星地球に38億年という歳月をかけてわれわれ人類のような“知性”を持つ生命体を生み出した“宇宙の意志”の現れなのかもしれない。

私は、いま私たちが持っているあらゆる科学的知識に照らし合わせてみて、この宇宙にはなんらかの“ユニバーサル・マインド意志”のようなものが存在する、と考えるほうがより科学的である、と思っている。

その宇宙の“こころ意志”のようなもののことを、人々は“神”と呼んでいるのかもしれない。

その意味で、ひとつの現象が科学的に理解できたとき、すべてがわかったように言い募るのは、科学者のとるべき態度ではないのだ」

私は彼のこの言葉を1996年、プリンストン高等学術研究所の研究室と、カナダの無人島・ハンソン島で聞いた。いまとなると本当に身につまされる話で

ある。

私たちには、大地震や大津波がいつ、どこで、どんな規模で起こるのかについては、いまだほとんど科学的にはわかっていない。

38億年前、確率的にはありようのないような“偶然”の重なりの中で初めての生命を生み出し、何度も大絶滅の危機を乗り越えて進化を続け、われわれ人類のような種を生み出し、多種多様な生命と共にいまも生かし続けている地球の精妙かつ超高度な生命システムについても、まだほとんど科学的には理解していない。

原子力は、150億年前、時間も空間もない無の虚空間から、突如起こった大爆発によってこの物質宇宙を生み出した宇宙根源の力エネルギーの源である。その力の片鱗を、ほんの少し科学的に理解しただけで、その力を制御できると言い募り、自分たちだけの利便と安楽を得るために使おうとした私たち人類の未熟さが、いまの未曾有の苦難を生み出している。

私たちは“わかっていない”ことがわかっていなかったのだ。

それでも希望はある。フリーマンはこう言っている。

「人間の想像力は絵空事ではない。人は心に描いたことをいつか必ず現実にする可能性を秘めている。そのために、“神”は人間に想像力を与えたのだ」

わかっていなかったことがわかったいま、私たちが心にどんな地球の未来を描くかによって現実の未来が変わってくるのかもしれない。